

大学教育と視聴覚教育活動

西本三十二

一、大学教育の近代化

大学は学問をするところであり、その学問というのは主として古典(The Great Books)を読み、それに関する講義を聴くことであると伝統的に考えられている。そこで、立派な図書館をもつということが、大学にとっては、欠くことのできない条件の一つとなっている。これは、東洋においても、西洋においても同じことである。

わが国学校教育の先駆をなす法隆寺学問所では、もっぱら仏典についての講義が行われた。さらに、平安時代に公卿の子弟を教えるために建てられた大学寮、弘文院、勸学院、学館院、奨学院にしても、また空海が庶民のために儒教、仏教をか綜ね教えるために設けた綜芸種智院にしても「これらの学寮は、素より文学ばかりでなく、そのほかに各種の学術を教授したものであるけれども、その拠る所の典籍は多く漢土の書であった」といわれている。⁽¹⁾ くだって江戸時代に各大名の建てた藩爨にしても、また幕府の昌平坂学問所にしても、もっぱら漢籍を教え、後には蘭学を加えるものも現われるに至ったものである。

わが国最初の近代的大学である東京大学は、米国において大学教育の経験をもつ米人モルレーの献策を容れて明治十年法学部、理学部、文学部、医学部の四つの学部をもって発足したのであるが、明治十年の文部省第五年報には、大学成立の事情を次のように述べている。⁽²⁾

「東京開成学校東京医学校ハ開設以来稍年所ヲ経体制漸ク備ハルヲ以テ明治十年四月之ヲ合併シテ東京大学ト改称シ其法学部理学部文学部ヲ旧東京開成学校ニ置キ其医学部ヲ旧東京医学校ニ置ケリ而シテ東京英語学校ハ原ト東京開成学校ニ進入スヘキ生徒ニ予備学ヲ授クルノ地タルヲ以テ之ヲ東京大学予備門ト改称シテ大学ニ隸シ又教育博物館小石川植物園ヲ更メテ大学ニ隸セリ」

これによって明治初年の日本の学問は、外国語とそれによる近代科学の修得ということが、その中心をなしていたことがわかる。従って民間においても外国語を教授し、原典講義をなす私立学校が多く設けられた。安政五年福沢諭吉によって創められた慶応義塾はその代表的なものであり、これらの私立学校は後に私立大学に発展するにいたった。

西洋における大学の発祥は、紀元前三、四世紀、アレキサンドリアにさかのぼることができる。そのころアレキサンドリアにはプトレマイオス一世の被護のもとに、蔵書数五〇万乃至七〇万に達するといわれた図書館がつくられ、大学が建設された。このアレキサンドリア式の学校制度をキルパトリックはその著「教育哲学」の中で次のように述べている。⁽³⁾

「紀元前三二三年、アレキサンダー大王の死後、約三百年間、プトレマイオス王国が、エジプトを支配した。

プトレマイオス一世以来、彼等はアレキサンドリアを世界での学問の中心にしようという方針をたてた。そして古代における最大の図書館を建設し、そこにはアリストテレスの所蔵していた全部の書物を移し、アテネの劇作家たちによって書かれた劇の定本を多く集めた。彼等はまた *scientific university* とでも呼んでよいような大学を建設し、そこからプレトマイオス式天文学が発達して、その後約一四〇〇年にわたって天文学界を支配し、またユークリッド幾何学が生まれ、この幾何学は、いまなお世界の国々で用いられている。

ところが哲学や文学の方面になると、その事情が大いにちがっていた。この方面では、ギリシア人がすでにアテネを中心としてすばらしい文化をきざし、比類のない古典の中に書きあらわしていたので、それよりもすぐれたものをつくり出すことができるという自信をもつことができなかつた。そこで次善の策として、この古典を教える学校を創設した。これが西洋において、文字で書かれた書物を用いて、その内容を教えるというだけの目的で学校というものが設立された最初のものであるといつてよい。

その後、ローマ人がアレキサンドリアを征服するに及んで、これと同じような学校をローマにもつくり、ローマの知識階級に属する人びとにギリシア語によって学問をひろめるにいたつた。そしてこういう学校が、それまでローマの青年を教育するためにあつた学校にとって代り、さらにこのアレキサンドリア式の学校は首都ローマから、ローマ帝国全土にまで及んだ。ついでギリシア語やラテン語で書かれたキリスト教の教義が世に出るようになって、それを教えるために、同じような型の学校が設立されるようになった。

中世になると、西欧諸国では、ラテン語が学問をする場合の言葉となり、宗教上の学問をする場合にも、また

一般の学問をする場合にも、もっぱらアレキサンドリア式の教育が行われた。さらに文芸復興期以後も、同じ学校教育の方式が持続され、古典の中に書かれてある学問や芸術が、新しい観点から読みとられ、新しい意味が吹きこまれることになった。」

W. H. Kilpatrick : *PHILOSOPHY OF EDUCATION*, Chapter XVI, pp. 222—3.

ボロニア(イタリア)、パリ(フランス)、オックスフォード及びケンブリッジ(イギリス)は、中世から今日までつづいている大学であるが、これらの大学も、アレキサンドリア式の書物中心、講義中心の古い教育の伝統をもちつづけてきたものといつてよい。書物は、人類の文化を継承し、また伝播するために、欠くことのできないものであると共に、人間形成のためにも重要な役割を果すものである。ところが従来の教育では、文字に書かれた知識や、言葉で言い現わされる知識を重んじ、言語中心の教育にかたよる傾向があった。これは verbalism と呼ばれ、ものを理解するのに、言葉の言いかえや、言葉の上での解釈にとどまって、その実体が把握されるにいたらない場合が多い。

人間形成のためには、豊富な経験を与え、内容のゆたかな生活を与えると共に、それを言語化し、一般化し、概念化し、抽象化させることが必要である。ここに生活主義の教育や経験主義の教育が重要な意味をもつことになる。そして、豊富な意味ある生活を営ませ、充実した教育を展開させるために、近代的な視聴覚教具や教材の利用が欠くことのできないこととなってくる。

従来、学者は象牙の塔にこもって、思索にふけり、学問のための学問をなすものである、という考えが強かっ

た。人類の文化は、人間の思索にその源を發するものであり、思索ということとは、學問するものにとって最も重要なことである。しかし近代における科学の發達と、學問の進歩は、實証的に思索し、經驗を通して考えることの必要であることを明かにするにいたった。

真理の探究に經驗の必要であることは、ベーコン（一二一四年―九四年）の帰納的學問研究の方式や、ガリレオ（一五六四年―一六四二年）の實証的科学的態度に見ることができる。また人間の教育に、言葉のほかに直觀の必要であることは、コメニウス（一五九二年―一六七〇年）の「絵より言葉へ」の主張を具現した世界最初の絵入言語教科書「世界図絵」にその先駆的な遠見を見ることができ、これによって、長い伝統にたてこもっていた言語主義教育はその機能に限度のあることが明かにされ、その方法に修正をうけなければならなくなったといつてよい。

ついでルソー（一七二二年―一七八八年）は、自然に即した人間性の開發と生産教育の重要性を説き、ペスタロッチ（一七四六年―一八二七年）は八十二年の生涯を貫く愛の教育の實踐を通して、勞作教育、直觀教育、郷土教育、經驗教育等、近代教育の源を培ったといつてよい。

二十世紀になってデュイイ（一八五九年―一九五二年）の經驗主義の教育、キルパトリック（一八七一年―）の生活教育の展開によって、学校教育の方法に大きな変化をもたらすに至った。しかしこれらの変化は主として小学校乃至中学校教育において見られるだけであつて、高等学校から大学教育に進むにつれて、依然として傳統的な言語中心、教科書中心、講義中心の教育が行われているといつてよい。

視聴覚教育は、太平洋戦争後、わが国の教育界に紹介された。そして過去十年ほどの間に、小学校及び中学校教育の中になりに採り入れられて、学校教育の近代化に資するところもあったようであるが、大学教育については、ほとんど影響を与えるところがなかったといつてよい。これは大学教育には、長い伝統がある上に、書物や講義と並んで有効に利用できる視聴覚的教具教材が未だ充分に提供されるに至っていないためでもある。

しかし最近における映画やスライドや写真や録音等の著しい進歩は、大学教育の中にもこれらのものを豊富に採り入れる可能性を示唆しているといつてよい。自然科学の分野では、つとに大学教育でも実験、実測、演習等が行われて来たものであるが、社会科学や人文科学の分野においても、視聴覚的教具教材をできるだけ多く採り入れることによって、大学教育の近代化をはかることは、大学教育の質的向上をはかるために重要なことといつてよい。

二、大学教育と図書館

人間は、道具をつくる動物である。道具をもつかもたないかということが、人間と他の動物とを区別する最も重要な鍵の一つである。道具の中には、箸や杖のようにきわめて簡単なものから、顕微鏡や望遠鏡や、さらに自動車や飛行機や原子力発電機のように複雑精巧なものにいたるまで、さまざまのものがある。道具発達の歴史が、人類発達の過程といつても、いいすぎではない。

ことばは、人間のつくった多くの道具の中でも、最もすぐれたものの一つである。ことばをもつことによつ

て、人間は、ものを考え、またそれを互に伝達（コミュニケーション）し合うことができる。さらに人間の経験は、これをことばで表現することによって、概念化し、抽象化し、一般化すると共に、それを通して経験を次の段階に高め、より高次の文化をきずき上げて行くことができるものである。

このように、ことばは、人間の生活になくはならぬものであるが、空間的にも時間的にも制約をうけることが多い。ところがそれを文字に書き、記録にとどめることによって、時間と空間を超えて、人類の文化をうけつぎ、それを積み重ね、それを発展させる上に役立つところ実に大なるものがある。

人類が文字をつくりだしたのは一万五千年前或はそれ以上も古い昔のことであろうといわれている。これは洞窟の壁や山中の絶壁にかきのこされたものや、粘土板や羊皮紙やパピルスなどにのこっているものを通して推定されたものである。そういう大昔から文字と書物は次第に発達して、十五世紀の半ばごろになって、ドイツでグーテンベルクによって活字印刷術が発明され、さらに紙が比較的安く且つ大量につくられるようになったことと相俟って、書物をつくることがきわめて容易となった。やがて十七世紀から十九世紀にかけて、いろいろの新しい知識の分野が大いに発達し、書物の出版も急速に伸展し、教育の水準が高まると共に、図書館の重要性が一そう加わるにいたった。

殊に大学は学問の府として、それぞれの分野においてすぐれた学者をもつとともに、内容の豊富な図書館をもつことが、欠くことのできない要件となっている。一九五一年に刊行された「⁽⁴⁾図書館総覽」によると、世界各国の大学で、百万部以上の蔵書をもっているものが、三七と報告されている。

この表には、日本の大学図書館はふくまれていないが、一九五五年、日本図書館協会発行の「日本の図書館（一九五四年）」によると、東京大学の中央図書館及び各学部並びに研究所にある蔵書を合せると、一、六九六、二九三（和書一、〇四三、九八九部、洋書六五二、三〇四部）となり、京都大学の蔵書数は一、三二五、三三九（和書九〇四、三〇五部、洋書四二一、〇三四部）となっている。それにつづくのは東北大学と九州大学で、その蔵書数は、それぞれ八六八、四四三（和書五〇五、四三二部、洋書三六三、〇一一部）、と七六二、四二九（和書五〇〇、〇五七部、洋書二六二、三七二部）となっている。以上いずれも国立大学であるが、私立大学では、早稲田大学の蔵書数が、五九七、五四〇（和書三九三、〇八二部、洋書二〇四、四五八部）、慶応大学の蔵書数が四五八、二二一（和書三九三、〇八二部、洋書二〇四、四五八部）と報告されている。⁽⁵⁾

またアメリカの大学図書館については、ACRL (Association of College and Reference Libraries) の機関誌 *College and Research Libraries* 一九五五年一月号に報告された統計によると、蔵書百万部以上を有する大学図書館の数は、さきの統計の場合よりも二つだけ増加して一五となっている。その大学名と蔵書数は次のページに記す通りである。⁽⁶⁾

アメリカ以外の国の大学で、蔵書数の多い大学は、ソ連のレニングラードの大学（三五〇万？）、フランスのパリ（一五〇万）、ツールーズ大学（一二二万）、イギリスのケンブリッジ（一五〇万）、オックスフォード大学（一五〇万）、ドイツのベルリン（一〇九万）、ゲッチンゲン（一〇〇万）、ケルン（一〇〇万）、ライプチヒ（一〇〇万）、及びミュンヘン大学（一〇〇万）、イタリアのフローレンスの大学（一七二万）、オランダのアムステ

TABLE I.

University Libraries in U. S. A.

| Name | Book Stock |
|--------------------------|------------|
| Harvard | 5,833,11 |
| Yale | 4,245,583 |
| Illinois | 2,789,863 |
| Michigan | 2,304,434 |
| Columbia | 2,069,795 |
| California (Berkeley) | 1,986,818 |
| Minnesota | 1,763,728 |
| Connell | 1,674,735 |
| Pennsylvania | 1,371,193 |
| Princeton | 1,275,703 |
| Northwestern | 1,146,163 |
| Texas | 1,095,284 |
| Ohio State | 1,056,226 |
| California (Los Angeles) | 1,051,677 |
| New York | 1,017,226 |

Source: "College and University Library Statistics, 1953-54" in 'Colleges and Research Libraries' Vol. XVI, No.1, January, 1955, p. 38.

ルダム(一五〇万) 及びライデン大学 (一〇〇万)、スイスのバーゼル(一三八万)及びツリヒ大学(一〇〇万)、ノルウェーのオスロ大学(一〇〇万)、スウェーデンのウプサラ大学

(一〇〇万)、ポーランドのワルシャワ大学(一一〇万)、ベルギーのリエージュ大学(一〇五万)、オーストリアのウィーン大学(一三二万)等である。^(?)

図書館は人類文化の宝庫である。近年における出版事業の発達にともない、大学図書館は、その蔵書数をいよ増加するばかりでなく、その管理と利用についても今後一そうの進歩を遂げることであろう。

また近年における写真技術の発達に伴い、貴重な文献や大きな印刷物を写真にとりマイクロ・フィルムとして保管し、またこれをマイクロ・フィルム・リーダーによって閲覧の便に供することも図書館活動の新しい分野

として登場することになった。なおこれと並行して、書物以外の視聴覚教具教材の整備及び管理も図書館活動の一翼として採り入れる大学も次第にその数を増加するにいたっている。

三、大学図書館と視聴覚教育活動

昔の図書館は、少数の学者や、将来学者や医者や聖職者になろうとする限られた人のために、書物を保管し、また保護する場所と考えられがちであった。ところが近代における民主主義思想の発展と、それに伴う教育の機会均等の実現によって、図書館は大衆の知的関心をたかめ、知的欲求を満足させるためにサーヴィスを提供する機関となってきた。これは大学図書館の場合においても同様である。殊に大学図書館は、学生の研究とその指導に役立つ図書ばかりでなく、その他教育上役に立つ視聴覚的資料をも図書と同様に、学生にもまたその指導に当る教授にも大いに提供すべきであるという傾向が強くなってきた。そしてこの傾向は、アメリカにおいて第二次世界大戦中から戦後にかけて、特に強くなってきたといつてよい。これについて、アリゾナ大学図書館司書ベネット氏 (Fleming Bennett) が、“College and Research Libraries”の一九五五年の一月号に寄せている報告によって多くの興味ある事実を知ることができる。⁽⁸⁾

この報告は、ACRLの中に設けられた Committee on Audio-Visual Work によって一九五二年三月行われた調査の結果をまとめたものである。なおこの調査にあたっては、アメリカにある大学図書館の全部と思われる一七二六の図書館に調査書を郵送したところ、四一通が返送されてきた。(それは大学の併合や廃止などによ

TABLE II

Pattern of Audio-Visual Service, By Size of Enrollment

| Pattern of Service | Size of Enrollment | | | Total (%) |
|--|--------------------|---------------|---------------|-----------|
| | 1000 or less (%) | 1001-5000 (%) | Over 5000 (%) | |
| (1) Centralized AV Service in the Library | 19 | 11 | 4 | 15 |
| (2) Centralized AV Service in a Separate Agency | 6 | 32 | 44 | 16 |
| (3) Decentralized AV Service, Library has more than other(s) | 4 | 3 | 4 | 4 |
| (4) Decentralized AV Service, Library has less than other(s) | 43 | 37 | 40 | 41 |
| (5) Decentralized AV Service, Library has no Service | 8 | 8 | 2 | 8 |
| (6) No AV Service on Campus | 20 | 9 | 6 | 16 |
| (7) Total No. Institutions (N=100%) | 366 | 159 | 50 | 575 |

大学教育と視聴覚教育活動

って、独立した存在ではなくなったためと思われる) 従って残りの一六八五の大学図書館が調査の対象となったわけであるが、その中五七五が回答を寄せて来ただけである。これは全体の三四%にすぎないのであるが、その大学はアメリカ全土に分布されており、アメリカの大学の三分の一についての調査であって、視聴覚教育資料が今日のアメリカの大学図書館においてどの程度運営されているかを知る上に一つの手がかりを提供するものといつてよい。

上の表は、大学の講義に役立てるための視聴覚教具、教材の提供が、大学図書館の管理のもとに行われているか、或は図書館以外のところで行われているかを調査した結果を、大学の大きさによって(即ち学生数千人以下、

千人から五千人、五千人以上の三つに分類して）現わしたものである。すなわちこれは、学生千人以下の大学三六六、学生数千人から五千人までの大学一五九、学生五千人以上の大学五〇についての調査がこの表にまとめられたものである。

註

- (1) は視聴覚教具教材が図書館の管理のもとにある場合。
- (2) は視聴覚教具教材が図書館以外のところで管理されている場合。
すなわち小さい大学では図書館がAV教具教材を取り扱う場合が多いが、大学が大きくなるにつれて図書館以外のところがその衝にあたる場合が多い傾向にあることがわかる。
- (3) 大学の学部や研究室にある図書館分室が主としてその衝にあたっている場合。（こういうことはきわめて少いことを数字が示している）
- (3) 大学の学部や研究室が主としてその衝にあたっている場合（それぞれの学部や研究室がその必要に応じてその衝にあたっている大学の最も多いことがこれによって知ることができる）
- (5) 図書館とは関係なく各学部や研究室がそれぞれ必要に応じて視聴覚的部門を設けている場合。
- (6) 視聴覚教具教材についてのサーヴィスが提供されていない場合。（世界のどこの国よりもAV教育が普及しているアメリカにおいても、これに無関心である大学が一六%あること。殊にそれが小さい大学に多いということがわかる。）

次にAV的活動の行われている大学では、大学図書館又は他のところで、どういうサーヴィスが提供されているかということは次のページの表によって知ることができる。

TABLE III

Audio-Visual Service Available, By Size of Enrollment

大学教育と視聴覚教育活動

| Services Available | Small: 1000 or less | | Medium: 1001-5000 | | Large: Over 5000 | |
|--------------------------------|---------------------|-------|-------------------|-------|------------------|-------|
| | Lib | Other | Lib | Other | Lib | Other |
| (1) Projectors | 40 | 51 | 17 | 19 | 7 | 14 |
| (2) Record Players | 72 | 40 | 26 | 12 | 10 | 7 |
| (3) Projectionist Service | 18 | 44 | 5 | 16 | 4 | 12 |
| (4) Listening Rooms | 53 | 23 | 23 | 5 | 7 | 5 |
| (5) Viewing Rooms | 25 | 47 | 10 | 15 | 4 | 12 |
| (6) Recording Service | 17 | 31 | 4 | 12 | 5 | 8 |
| (7) Photographic Production | 10 | 16 | 7 | 10 | 6 | 4 |
| (8) Instruction | 30 | 47 | 8 | 15 | 6 | 10 |
| (9) Reference and Consultation | 66 | 30 | 22 | 13 | 12 | 10 |
| (10) Other Services | 12 | 2 | 1 | 4 | 2 | 3 |

註

- (1) 映写機 (十六ミリ・トーカーが多い)
- (2) 蓄音機
- (3) 映写技師
- (4) レコードの聴取室
- (5) 映写室
- (6) レコードの貸し出し
- (7) 写真製作
- (8) 操作実習
- (9) 指導助言

以上は図書館の管理のもとにある視聴覚教育活動の一端を考察したのであるが、アメリカの大きな大学では、図書館とは別個に独立した Audio-Visual Center を新設して、大学教育の近代化をはかろうとしている傾向がうかがわれる。殊にアメリカの視聴覚教育の発端は映画教育を中心とする視覚教育にあった関係もあって、Audio-Visual Center に

Film Library をもち、ここに一万乃至二万種数の教育映画を所蔵して、これを自給自足の体制のもとに、学内および学外に貸出している大学も少くない。

大学図書館と Audio-Visual Center (Instructional Material Center) とがどういふ関連のもとに運営されるべきかということは、アメリカにおいても、また将来日本においても大いに検討されるべき問題といふべきであらう。

四、ICU の視聴覚教育活動

ICU の大学図書館は、一九五二年社団法人国際基督教学園が成立したところから、もっぱら図書を中心に、内外の書物の蒐集にとりかかり、すでに五万部の書物を所蔵して大学図書館の基礎をきずきつつある。そして一九五三年四月、学校法人国際基督教大学の発足と共に、視聴覚教育センターが創設され、もっぱら視聴覚教育の研究と、視聴覚教具、教材の蒐集、作製にとりかかり、現在その建設途上にある。

ICU 視聴覚教育センターは大別して四つの役割を果すことになっている。

第一は、大学に視聴覚教育の講座を開設することである。その前提として、一九五五年第一学期に、教養学部学生のために視聴覚教育についての基礎的概念を与えると共に、将来中学校、高等学校の教師となり、また映画、放送、新聞雑誌等ジャーナリズムの方面に進む場合に役立つよう、講義、ディスカッション、視聴覚教具教材の操作実習、実演等を総合して、二単位の「視聴覚教育」コースを開設した。そして近い将来に、視聴覚教育

に関する講座を開設し、その中に、視聴覚教育の程度の高いコースをはじめ、映画教育、放送教育、テレビジョン教育、マス・コミュニケーションに関するコース等を開くことを計画している。

第二は、教養学部の教授及び学生のために、その講義に必要な視聴覚教具、教材をとりそろえ、その教育的利用に協力することである。現在でも、自然科学科、社会科学科、人文科学科及び語学研究科の講義に、映画やスライドや写真、図表やテープ・レコーダー等を利用するについて、毎週平均二十余回のサーヴィスを提供している。これがために映写機四台、幻灯機四台（実物幻灯機一台をふくむ）、蓄音機二台、テープ・レコーダー三台は、視聴覚教育センターに常備し、ほかにテープ・レコーダー五台は語学研究科専用のものがある。

第三は、視聴覚教育についての研究である。現在視聴覚教育センターには、教授二人、助手二人、技術員一人、秘書一人、計五人の人員を配置し、視聴覚教育に関する文献や資料を蒐集し、それを検討し、研究をすすめている。もちろんこの研究は、視聴覚教育についての理論的研究ばかりでなく、以上第一及び第二の役割遂行に伴って起ってくる実際問題と関連して調査研究を行うことはいままでもない。

第四は、大学の外にむかっただけの奉仕及び協力である。視聴覚教育は、わが国においては、一九四八年ころから小学校、中学校において提唱され、実施され出したものである。従って小学校、中学校の実際家の間では、かなり進んだ実践もあり研究もあるが、教員を養成する教育（学芸）大学や教育（学芸）学部における研究は、きわめて緩慢であって、小、中学校の実際家の要請に対して殆んど応えることができない。これでは新時代の教員を養成する上にも支障があるというそしりをまぬがれない。そこでICU視聴覚教育センターでは、一九五四年八

月の最後の一週間、全国の教員を養成する大学及び学部の教育学または心理学担当の教官五十余名の参加を得てサマー・セミナーとして第一回視聴覚教育研究協議会を開き、「大学において二単位及び四単位の視聴覚教育コースを如何に組織するか」という議題を中心に視聴覚教育に関する各種の問題を研究討議して多大の成果をあげた。⁽⁹⁾ ついで一九五五年の七月には、第二回視聴覚教育研究協議会と、第一回放送教育研究協議会を開いた。視聴覚教育については、昨年度の研究の基礎の上に新しい研究をのみ重ね、大学におけるAVセンターの組織と機能についても新しい研究を加えた。また放送教育については三十年来行われて来た日本の放送教育を検討して、その学問的、基礎的研究と実際的研究との結びつきをはかることにした。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾ (この二つの研究協議会の記録は目下印刷中である。) なおこれらの研究協議会は今後も毎年継続的に開催し、これを発展させていくことが要望された。そしてこれは将来、教育学部大学院において一そう充実した視聴覚教育講座を展開する上に参考となるところ大なるものがあつた。

なお目下設立途上にあるICUフィルム・ライブラリー及びテープ・ライブラリーは、学内へのサーヴィスだけでなく、学外へのサーヴィスについても考慮中である。現在われわれは、二十種の教育映画をもっていて、もっぱら学内において教育的に利用している。しかしわれわれは二年以内に二百種の教育映画を所有するにいたるよう計画している。二百種というのは、教育心理学に関するもの五十種、教育方法に関するもの五十種、自然科学、社会科学、人文科学、英語研究の各分野について各二十五種、計百種という予定である。

わが国では、大学教育に適するような教育映画は皆無に近いといつてよい。外国特にアメリカは、最近二十年

の間に小学校、中学校、高等学校、大学において有効に利用される映画が多く製作され、近年特に長足の進歩をなしているから、日本の大学教育に適するもの二百種ぐらい選び出すことは困難ではない。そしてこれらの映画は、ひとりICUだけが利用するのではなく、全国の大学の利用に供することによって、わが国の大学教育に寄与するところ少くないであろう。なおこの計画が軌道にのるにつれて、さらに小学校、中学校、高等学校のためのフィルム・ライブラリーをもつけ加えることになるであろう。

次に近年録音機の普及発達に伴い、教育に利用できる録音教材に対する要望が高まりつつある。われわれはすでに中学校および高等学校用の英語教科書のテープ録音を作製して、テープレコーディングの将来性について明るい見とおしをつけることができた。そして録音及び再録用のテープ録音機マグネコーダー一式をアメリカに注文し、本館の四階にある三室をテープ・ライブラリーに改装することにしてゐる。これを活用することによって、一九五六年度には、学内及び学外にも音の教材を豊富に提供できることを期待してゐる。

大学教育のためには、教科書、参考書、辞典その他多くの印刷物は、ながい年代にわたって広く利用されて来た。そして印刷物は今後もながく、大学教育において重要な地歩を占めて行くであろう。

しかし近代における目ざましい科学の発達は、学生にも一般人にも、学ぶべき内容と領域を著しく拡大した。またコミュニケーションに関する技術の発達は、教育の形態を大いに変化させるにいたった。さらに近代における教育の理念や方法についての進歩は大学教育にも、書物と講義のほかに映画、テレビジョン、テープレコード等多くの視聴覚教具教材を採り入れるべきことを示唆しつつあるといつてよい。小学校および中学校におけるこ

の方面の進歩には、かなり見るべきものがあるが、高等学校から大学に進むに従って、伝統的な教育の理念や方法が依然として支配的な力をもっている。大学教育が、少数の特権的階級のために存在した昔の時代とはちがって、大学の門はすべての青年に開放され、その学業の成果はまた国家社会の福祉増進と学術の進歩に深いつながりをもつにいたっている。今後の大学は書物以外にあらゆる視聴覚教具教材を出来るだけ豊富に採り入れて、その教育的効果を高めると共にその研究を一そう深めることに大いに努力を払うべきであろう。大学教育における視聴覚的方法の展開ということは、今後における重大な問題の一つとすべきである。

註 (1) 辻善之助著、日本文化史2春秋社刊、一九五二年 二二頁—二三頁

(2) 文部省「学制八十年史」一九五三年

(3) W. H. Kilpatrick, PHILOSOPHY OF EDUCATION, McMillian Co. 1952, Chapter XVI, pp. 22—3.

(4) 天野敬太郎編「図書館総覧」p. 29—31「世界の大図書館」一九五一年

(5) 日本図書館協会「日本の図書館」(一九五四年) pp. 50, 54, 62.

(6) "College and University Statistics, 1953—54" in 'College and Research Libraries' Vol. XVI, No. 1, January, 1955, p. 38.

(7) (4)に同じ。

(8) "Audio-Visual Services in Colleges and Universities in the United States" in 'College and Research Libraries' Vol. XVI, No. 1, January, 1955, pp. 11—20.

(9) 国際基督教大学編「視聴覚教育研究集録」I 一九五四年

(10) 国際基督教大学編「視聴覚教育研究集録」II 一九五五年

(11) 国際基督教大学編「放送教育研集録」I 一九五五年